

平城京の疫病対策 —医療・まじない・祈り—

都城発掘調査部 考古第二研究室長 神野 恵

はじめに

「あをによし ならのみやこは 咲く花のにほふがごとく 今盛りなり」万葉集におさめられているこの歌は、神亀5年(728)に大宰府に赴任した小野老が平城京の繁栄を詠ったものとして有名である。

この数年後の天平7年(735)、栄華をきわめる平城京に疫病蔓延の危機が迫る。大宰府管内で天然痘とみられる疫病が流行し、たくさんの死者が出たことを『続日本紀』は生々しく伝えている。翌年には一旦、収束したともみられているが、天平9年(737)4月に再度、大宰府管内で流行がはじまると、7月には平城京をはじめ畿内以東まで、日本列島は大流行の災禍にのみこまれた。

天平年間、平城京には市が置かれ、たくさんの人や物資が集まった。唐・新羅・渤海など諸外国との交流も活発であった。都市の人口増加と活発な海外交流は疫病が流行する背景として、現代社会に通じるものがある。この迫り来る疫病に、平城京の人々はどうのように立ち向かったのだろうか。

1. 二条大路の濠状土坑はゴミ捨て穴

1980年代、商業施設の建設に先立っておこなわれた平城京左京二条二坊、三条二坊の発掘調査で、「長屋親王宮」と書かれた木簡が出土し、話題を呼んだ。出土した木簡などから、二条大路を挟んで、南側には長屋王の邸宅跡(のちに皇后宮職が置かれた)、北側には藤原麻呂の邸宅があったと推定されている(図3・4)。大路の路肩に沿って、濠状のゴミ捨て穴が見つかっており、ここからは、たくさんの木簡や土器、木製品などが出土した。木簡に記された年代は、天平9年(735)頃から天平10年(736)頃のものを中心で、なかには天然痘の終息を願う呪符木簡が含まれていた(図1)。これらの濠状土坑は、まさに天然痘が平城京に蔓延した時期のものだったのである。

2. 呪符木簡

SD5100 から出土した呪符木簡には、「南山のふもとに、流れざる川あり。その中に一匹の大蛇あり。九つの頭を持ち、尾は一つ。唐鬼以外は食べない。朝に三千、暮れに八百。急急如律令。」といった内容が書かれていた。これとよく似た呪符が唐代の医学書『千金翼方』に記載されている。古代中国では、天然痘などの感染症は、「瘡鬼」が引き起こすと考えられていた。『千金翼方』では九頭蛇が食べるのは「瘡鬼」であるが、この木簡には「唐鬼」と書かれている。これは、単純に書き間違えたか、天然痘が外国から伝染したことを意識して、わざと「唐鬼」とアレンジしたとも考えられている。

SD5300 からは木箱蓋の内側に「此物能量者患道者吾成明公莫憑必退山陽道」と書かれた木簡も出土した。書かれた内容は、はっきりとはわかっていないが、天然痘が自分の主人に取り憑くことなく、山陽道を去って欲しいと願う呪符と考えられている。

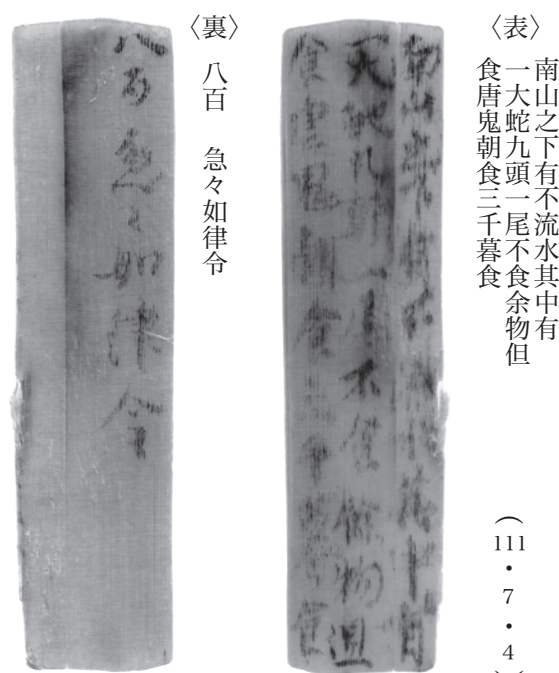


図1 SD5100 から出土した呪符木簡

3. 奈良時代の疫病対策

『続日本紀』は、天然痘でたくさんの死者が出たこととあわせ、さまざまな対応策を講じたことを伝えている。また、これまでの発掘調査から、平城京の人々がとった疫病対策がわかってきた。そのなかには、私たちが今まさに新型コロナウイルス感染症を経験しているからこそ、気づいたこともある。ここでは、現代の疫病対策になぞらえて、奈良時代の疫病対策をみてみよう。

税の免除、食料・医薬の提供 天然痘が流行し始めると、聖武天皇は税の免除をおこない、たびたび食料や薬湯などを支給した。高齢者や僧尼、罹患者などに食料や薬湯を施した記載が何度も出てくる。しかし、天然痘の猛威は止まらず、天平9年6月には、官人の病死者が多く、中央政府は完全に機能不全に陥ったようである。この時、太政官は諸国に官符を発し、療養法を指導した。この治療法の内容は、食事に関する注意事項や薬事に関する内容である。食事については、粥や粟汁などを食し、魚肉および野菜の摂取を禁じ、水・氷・酒の飲用を戒め、油物を控えるように記されている。薬物治療については、大黃・青木香・黄蓮を煎じて服用せよといったことが記されて

いる。これらの薬は、正倉院にも納められているが、当時はとても高価なものだったと考えられ、実質的には、一部の高貴な人々にしか処方することができなかったのではないだろうか。

神仏への祈祷・読経 諸寺には読経を命じ、神社には幣を奉ることを命じた。古代の人々にとって、「祈り」と「医療」は、現代人が想像するよりも、はるかに近いものであった。古代の人々は病気の原因は穢れであると信じていたので、身代わりとなる人形に穢れを移し、水に流すといった「まじない」を医療としておこなっていた。また、仏教の経典には、古代インドの医療知識が詰め込まれており、病人を看護するのは僧侶の重要な役割であった。僧侶が読経と唱え、加持祈祷を行い、病気平癒を願うことも、立派な医療行為だったのである。

水際対策―道饗祭 天然痘の流行は、第1波、第2波とも大宰府管内からはじまった。拡散を食い止めようと、長門（現在の山口県）より東の諸国に道饗祭を命じた。この道饗祭とは、病気の原因となる疫病神が入ってくるのを、道路のうえで饗応し、帰ってもらおうという祭祀である。まさに、現在の水際対策とも言えるだろう。平城京の玄関口である羅城門の東側、東一坊

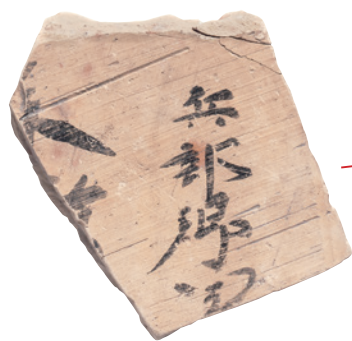


図2 「兵部卿宅」と書かれた土器

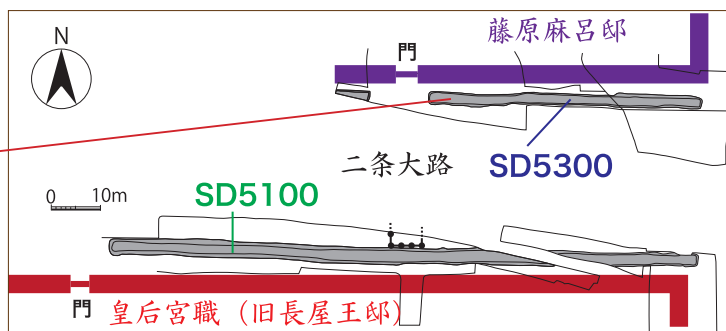


図3 二条大路の路面に掘られたゴミ捨て穴

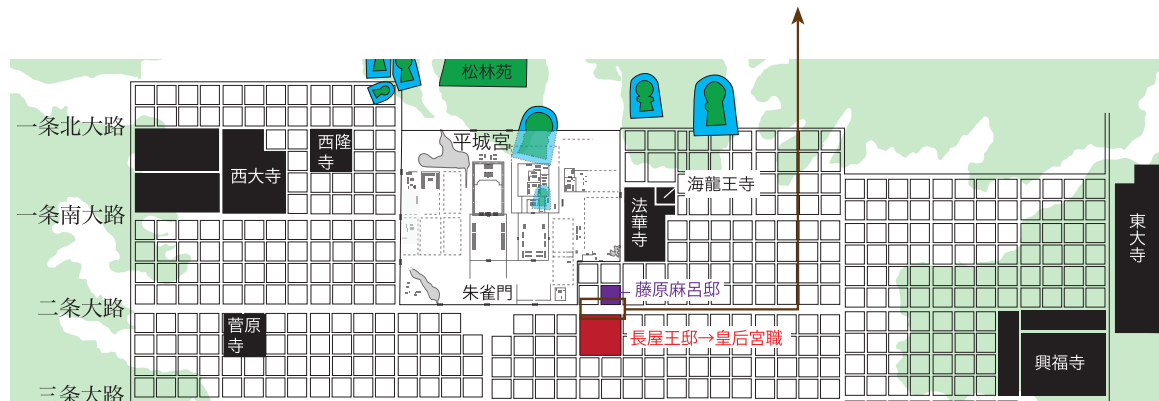


図4 平城京内の藤原麻呂邸と旧長屋王邸の位置

大路与九条大路の交差点付近で、道饗祭の可能性がある遺構が見つかった。ちょうど天然痘流行と同じ時期の土器を使っていることや、路面に井戸を掘って、ほとんど未使用の土器がたくさん捨てられていることから、道饗祭に用いたと考えられる。この位置は、まっすぐ北に伸ばすと平城宮の壬生門に突き当たり、その門に入ると、天皇が暮らす内裏がある。平城京に迫り来る天然痘を、なんとかこの場所で食い止めようとしたのではないかと、あらためて注目されている。

食器の使い回しを禁止 SD5100とSD5300からは、木簡のみならず、まだ使えそうな食器がたくさん出土した(図5)。なぜ、大路の路面という公共の場におびただしい数の食器が捨てられたのだろうか？その理由については、これまであまり深く考えられていなかった。しかし、新型コロナウイルスの感染予防に努める私たちには実感ができる。これらの食器は、感染者が出た家で使われていた可能性が高いのではないだろうか。

その可能性を示す資料がある。北側のSD5300から出土した「兵部卿宅」と書かれた土器である(図2)。当時の兵部卿は天平9年に天然痘でなくなった藤原麻呂。つまり、これらの食器は、藤原麻呂の邸宅で使われていたものを含むと考えて良いだろう。古代の食器は、一般的に素焼きの土器である。食器洗い洗剤などなかった時代、このような器をきれいに洗うことは難しかったと思われる。そのため、感染者が使った食器をすべて廃棄処分することは、最善の感染予防策だったのだろう。

新しい生活様式 天然痘が収束してほどなく、聖武

天皇は平城京を離れ、恭仁、信楽、難波へと都を遷し、5年後に平城京に戻る。日本史では、この前後で奈良時代は前半と後半に区分されている。考古学の方野でも、前半と後半で出土する土器に大きな変化があることが認識されていた。奈良時代前半には、比較的大きな食器が多く、小型食器は多くはない。しかし、後半になると小型の食器、とくに土師器碗がたくさん使われるようになる(図6)。

この変化の理由について、私たちはこれまで、あまり上手く説明ができていなかった。ところが、現代の感染症予防策が、有力な仮説を与えてくれた。政府や専門家が、新しい生活様式として、大皿での食事を避けるように呼びかけている。この土器が変化するのは、ちょうど天然痘が流行する前後であるため、奈良時代の人々も、感染予防のために大皿での食事を避けようとしたのではないだろうか。つまり、奈良時代後半の小型食器の増加は、アフター天然痘の新しい生活様式ではないかと考えられる。

新たな祈り、病原の可視化 奈良時代後半になると、新たな祭祀が流行する。人面墨書土器は、土器に疫神^{えきじん}や鬼を描いたとされ(図7)、ここに息を吹きこんで、水に流したと考えられている。平城京でも南辺、とくに西市や東市付近の溝からたくさん出土する。奈良時代後半になって流行し、平城宮の近くではほとんど出土しないため、アフター天然痘の民間療法だったのだろう。天然痘という目に見えない敵は、人々にとって大きな恐怖だったに違いない。疫神を描くという行為は、近世のアマビエ信仰などと同じく、病気の原因を可視化する意味があったようだ。それはあたかも、現代の私たちが新型コロナウイルスのニュースに、電子顕微鏡の画像を添えるのと同じ心理かもしれない。

噂の流布、原因究明、再発防止 さらに南側のSD5100



図5 SD5300から出土した食器



図6 奈良時代後半の小型食器



図7 平城京から出土した人面墨書土器



図8 SD5100から出土した燃灯供養の灯明皿

からは、たくさんの灯明皿が見つかった。現代の万燈会のように、灯明を並べて読経をおこなう燃灯供養の痕跡と考えられる。この当時、灯明油は大変貴重であったため、大規模な燃灯供養をおこなうのは、多大な出費であったはずである。この燃灯供養は、誰が、どのような目的でおこなったのだろうか？

この燃灯供養は、いろいろな器を寄せ集めて灯明皿として用いていた(図8)。つまり、緊急性の高いものだったと推定される。灯明皿が捨てられた年代は、天然痘が終息して間もない天平10年(738)頃。供養が行われた場所は、隣接する皇后宮職が置かれた場所と考えるのが妥当であろう。この場所がかつての権力者、長屋王の邸宅であった。長屋王は、光明皇后の兄である藤原四兄弟(武智麻呂、房前、宇合、麻呂)の策略により、この場所で自刃をよぎなくされた。その8年後、天然痘はこの四兄弟の命を次々と奪ったのである。この頃には、天然痘流行は長屋王の祟りではないか？との噂が拡散していた可能性が高い。光明皇后は写経事業をおこない、聖武天皇は長屋王の子供達の位を上げるなど、名誉回復をはかったとみられている。この燃灯供養は、長屋王の祟りを鎮める目的

で行われた緊急の法会だったとすると、まさに天然痘の原因究明と再発防止策だったともいえる。

4. おわりに

文献資料によると、この時の天然痘の大流行では、実に4人に1人が命を落としたと推定されている。この未曾有の災異に、中央政府は国を揚げて医療の提供、食料の支給、税の免除に取り組み、疫民の救済にあたった。その様子は『続日本紀』に詳しく記録されている。そして、平城京の発掘調査は、こういった記録には残っていない平城京の都市民達の努力と工夫を伝えてくれた。

平城京に暮らす人々は、現代科学や医療の知識もないなかで、勇敢に迫り来る疫病に立ち向かわざるをえなかった。その疫病対策は、いま現在、未知の感染症と戦う現代の私たちと通じる点が多い。人類は歴史上、このような疫病との闘いに幾度となく立ち向かい、力を合わせて打ち勝ってきた。疫病との闘いが、人間に叡智を授け、共生する社会を考えさせ、物質文化を変化させる—平城京の人々は、1300年後の私たちに、そう語りかけてくれている。



神野 恵 (じんの・めぐみ)

都城発掘調査部 考古第二研究室室長

1973年 大阪府生まれ

1996年 京都大学文学部卒業

2000年 京都大学大学院人間環境学研究課博士課程退学

同年 奈良国立文化財研究所 研究員に採用

2020年 現職

現在の専門分野は、日本考古学・東アジア考古学